

個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指す 小学校国語科における ICT を活用した授業改善方策の検討

水戸部 修治
(教育学科教授)

コロナ禍で一変した学校の授業では、一人1台端末の活用が一般的なものとなった。一方で ICT 機器をどのように用いることが、指導のねらいを実現する手立てとして有効なのかについては今後一層の検討と実践の蓄積が必要な状況である。近年の小学校国語科の学習指導における ICT 活用の状況を踏まえ、今後の有効な活用の在り方を検討した。

キーワード：授業改善, 小学校国語科, ICT, 個別最適な学び, ロングレンジの学習

1. 研究の目的

授業実践への ICT 機器、とりわけ一人1台端末の導入は、コロナ禍を背景に急速に進んでいる。2020年度末の文部科学省の調査では、全自治体等のうち1,769自治体等(97.6%)が2020年度内に納品を完了(「納品完了」とは、児童生徒の手に端末が渡り、インターネットの整備を含めて学校での利用が可能となる状態を目指す。)する見込みという結果が示された。(注1)

筆者が本年度参観した小学校国語科の学習指導においても、半数を超える授業で一人1台端末が用いられており、かつ加速度的にその利用頻度も多くなっている。

急速に普及する ICT の活用に当たっては、通信環境の整備や機器利用の際のセキュリティ保持といった面での課題や、利用の仕方そのものの教員研修、更には児童生徒の利用モラルの指導といった面での課題は大きい。しかし教育に用いる ICT の利用の在り方を検討する上では、それらの課題にとどまらず、教科等の指導の本質的なねらいを実現する手段として、いかに効果的に ICT、とりわけ一人1台端末を学習指導に取り入れていくのかについて、更なる検討を要する状況である。またそうしたことを踏まえて授業改善を進めることによって、児童

生徒がお互いを尊重し合える人間関係もよりよく形成できると考えている。

本論考においては、これまでの考察を土台に、本年度実践された小学校国語科の授業実践を分析し、ICT、特に一人1台端末の活用の具体的方策を検討し、それを集積していくことにより、今後小学校国語科の授業改善に機能する有効な ICT 活用の在り方を解明するための土台をつくることを目指す。

2. 研究の具体的な方法

筆者は、小学校国語科の指導のねらいを実現する上で、ICTを用いる際の視点について基礎的な検討を行ってきた。(注2)ここから明らかになった視点に、その後の検討を加えて事例分析の基本的な視点を設定する。また2021年度に共同研究し授業を参観した実践事例から、ICT活用を取り入れたものを取り上げ、その成果とより効果的な改善の方策を検討する。更に現時点での実践の成果を集約し、今後の改善方針と具体的な方策を検討する。

3. 小学校国語科学習指導で ICT を用いるための基本的な視点

(1) 小学校国語科の授業の基本的な枠組み

ICT 活用の在り方を検討する前提として、対象となる小学校国語科の学習指導の基本的な枠組みを押さえる必要がある。

平成 29 年に公示された小学校学習指導要領第 2 章第 1 節国語の教科目標には、冒頭に次のように示されている。(注 3)

「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」

ここで言う資質・能力とは、具体的には各学年の内容に示す指導事項であると捉えることができる。すなわち国語科は、単元レベルで言えば、当該単元で指導する指導事項を、適切な言語活動を通して指導することが学習指導の基本的な枠組みとなる。

(2) 指導のねらいを実現する ICT 活用の基本的な要件

小学校国語科に限らず、各教科等で ICT を用いるのは、それ自体をねらいとするものではない。各教科等のねらいを一人一人の児童に十分に実現するための手立てとして用いることとなる。こうしたことを踏まえこれまでの拙論においては、国語科授業への ICT 導入の留意点としては次のようなことが重要であるとの指摘を行ったところである。(注 4)

- ① 指導のねらいに応じた活用が大原則
- ② 子供たちが必要とする言語活動場面での効果的な活用を工夫する
- ③ 校外外での指導に関する情報収集や共有を図る
- ④ セキュリティの確保や情報制御、備品管理等を確実に行う

このうち、本論考に直接関わる事例分析の視点としては①及び②が挙げられる。

(3) 個別最適な学びの視点からの授業改善に資する ICT 活用

2020 年度段階では、教師が授業を進めるツールとして ICT を用いることが多かったのに対して、前掲の文部科学省による調査の結果の通

り、2021 年度以降一人 1 台端末の導入が進んできた。このことにより、児童自身が端末を用いて学習を進める授業実践が飛躍的に増えてきた。この状況を踏まえると、教師による一律一斉の活用にとどまらず、児童自身が必要なタイミングで必要なデータを用いたり、学習支援ソフト等の機能を駆使したりする、いわゆる個別最適な学びを志向する活用が重視されることとなるであろう。

中央教育審議会答申(注 5)は、子供たちの多様化が進む中で「個別最適な学び」とその重要性について、次のように指摘している。

「子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの『指導の個別化』が必要である。(中略)子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する『学習の個性化』も必要である。

以上の『指導の個別化』と『学習の個性化』を教師視点から整理した概念が『個に応じた指導』であり、この『個に応じた指導』を学習者視点から整理した概念が『個別最適な学び』である。(中略)『個別最適な学び』が『孤立した学び』に陥らないよう、(中略)『協働的な学び』を充実することも重要である。」

例えば従前は、教室で全員が同じ教材文の同じ箇所を、教師の発問によって読み進めるといった授業形態が一般的であったのに対して、「教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行う」といった個に応じた指導を一層推進するなど、授業改善を適切に進めていくことが求められる。ICT の活用により、そうした授業改善が一層日常的に進めやすくなることが期待される。

なお、ICT の活用に当たっては、児童自身が著作物を複製等によって使用するケースも多くなる。その際、著作権に関する法律及び諸規定に従って運用(注 6)するとともに、児童に対して、発達の段階に応じて著作権について指導していくことも必要となる。

4. 対象事例の選定について

本論考においては、2021年7月中旬以降に実践された小学校国語科の授業を分析の対象として取り上げる。前述の通り多くの自治体で、2020年度末までに一人1台端末の整備が進んだものの、実際の運用までには若干のタイムラグが生じていた。7月中旬以降は数としても多くなったことに加えて、使い方についても明らかにそれ以前とは様相が異なっている。

また取り上げる国語科の授業については、前述のように、単元の指導のねらいを、学習指導要領を基に的確に設定し、それにふさわしい言語活動を位置付けるとともに、児童が課題解決の過程を学び進めていくことができるよう緻密に授業改善を図った実践を選定した。

基本的には授業構想段階で筆者もオンラインもしくは電子メール等のやり取りによって参画し、授業者の意図を把握しつつ、学習指導要領を基に、子供たちが主体的・対話的で深い学びを展開することを目指して授業構想の検討を行ったものである。

分析に当たっては、学習指導案を基に授業の概要を押さえるとともに、次のような視点で検討を進めた。

- (1) 国語科としての授業改善をどのように進めているか。
- (2) 授業、特に本時においてどのようにICTを用いているか。
- (3) ICTを用いたことで、国語科の指導のねらいを実現する上でどのような効果があったと考えられるか。
- (4) 更に効果的な活用を考えるとすれば、著作権法及び諸規定に従いつつ、どのような使い方が検討できるか。

5. 事例の検討

(1) 事例1

- ①授業実施時期 2021年7月
- ②学年 第6学年
- ③主な教材 「森へ」
- ④主な言語活動 ブックトークを行う
- ⑤主な指導事項 知識及び技能(3)オ 日

常に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに役立つことに気付くこと。

⑥単元及び本時の概要

テーマを設定してグループでブックトークを行う学習。本時は7時間扱いの6時間目、ブックトークを行う時間である。

⑦授業実践の工夫とICT活用の状況

ア. 授業実践の工夫

児童は前時までのブックトークの準備において、自ら設定したブックトークのテーマに基づいて、3冊の本を選んだ。またその内容をタブレットを用いてスライドとして作成していた。教師自身が本を選ぶなどして、ブックトークについて、選書の過程から最終的な提示に至るまで丁寧にモデル提示していたことにより、児童は単元のゴールを見通して主体的に学習を進めることができていた。授業者によれば、通常は比較的学びに向き合いにくい児童も、繰り返し本を読み返すなどして選んだり、3冊の提示順を真剣に検討したりするなどして取り組めたとのことである。

イ. ICTを活用した授業改善の成果

児童は、一人1台端末にブックトークのスライドを作成していた。ブックトークで伝えたいことをプレゼンテーションの際のスライドにまとめるためには、読んで感じたこと、伝えたいことを厳選する必要がある。また上記のように、どの順で本を紹介するのかについても、児童なりの試行錯誤の過程が重要になる。通常の紙ベースでの資料作成に比べると、こうした一連の準備から本時の発表に至るまでの過程を、タブレットで完結できるため、児童は見通しをもって自分のペースで学習を進めることが可能となる。また教師の側から見た場合も形成的な評価や単元の総括評価のデータを把握し易いという利点が挙げられる。

ウ. 更なる改善の糸口

本時の児童のタブレットの使い方は様々であった。タブレットのみでプレゼンテーションしている児童に比べて、本そのもの

を併用している児童の発表は、非常に力のこもったものであった。本単元の主目標が読書の指導事項であることを踏まえると、本を中心に用いて、スライドは補助的に使用することも考えられる。教師のプレゼンテーションモデルを示す際に、一層ねらいに応じた例示が重要になると考えられる。

(2) 事例 2

- ①授業実施時期 2021 年 7 月
- ②学年 第 1 学年
- ③主な教材 「くちばし」
- ④主な言語活動 図鑑から自分の好きな生き物を見つけて紹介する。
- ⑤主な指導事項 C 読むこと カ 文章を読んで感じたことや分かったことを共有すること。
- ⑥単元及び本時の概要

教科書教材や図鑑から、生き物の「すごい」ということを見つけて紹介する。本時は 9 時間扱いの 8 時間目、図鑑などを用いて紹介し合う学習場面である。

- ⑦授業実践の工夫と ICT 活用の状況

ア. 授業実践の工夫

本時は「読むこと」における「共有」の資質・能力の育成を主なねらいとしている。そのため、本時までには様々な学習活動においてペア交流を十分に取り入れるとともに、自分が強く興味を引かれる生き物を図鑑から選んで見付けられるよう丁寧に指導がなされていた。その結果、まだ入学して 3 か月ほどしか経過していない 1 年生の児童が、夢中になって図鑑を用いてペア交流する姿が実現されていた。

イ. ICT を活用した授業改善の成果

本時は、導入時に本時に先立つ教科書教材での同様のペア学習の時間における児童のペア交流の様子を収録した動画を提示していた。同じ学級の児童が映っているため、視聴する児童も教師によるモデル動画を提示する場合以上に集中して見入っていた。

本時の主なねらいは「読むこと」の「共有」の能力であるため、ペア交流を充実し

たものにするための具体的な手立てが不可欠である。従来は対話のポイントを、口頭や箇条書きによる確認で進めることが多かった。例えば「友達が説明したら、感想や質問を言う。」といったものである。しかし特に低学年の児童は、それらを実際の対話場面でイメージすることはなかなか難しい。それに対して動画を使用することで、対話の際の言葉のやり取りのみならず、どのような位置関係で座るのか、図鑑をどのように読み合うのかといった具体的な姿をはっきりと確認することができ、大きな効果があると言える。

ウ. 更なる改善の糸口

入門期の時期であるだけに、本時では動画を視聴した後、更にポイントを確認していた。これは 1 年生の学習指導として確実に期するための手立てでもあるが、その分動画を見てから実際に対話が始まるまでのインターバルが長くなってしまおうというデメリットも併せ持つ。日常的にこうした動画を活用することで指示や確認の時間を削減して、指導のねらいに直結するペア活動の繰り返しの時間を最大限確保することが望まれる。そのためには、できるだけ日常的にペア交流を取り入れるとともに、動画を視聴する際は、どこをポイントとして児童と共有するのかを明確に把握することが重要になると考えられる。

(3) 事例 3

- ①授業実施時期 2021 年 9 月
- ②学年 第 5 学年
- ③主な教材 「アンパンマンの勇気—やなせたかし」
- ④主な言語活動 伝記を読んでなりたい自分を明らかにする。
- ⑤主な指導事項 C 読むこと オ 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること。
- ⑥単元及び本時の概要

教科書教材のやなせたかしの伝記や自分

の選んだ伝記を読み、どこにあこがれを感じるのか、またそれはなぜなのかを明らかにする。本時は7時間扱いの6時間目、自分の心を支える一文や疑問について交流し、言動や業績、筆者の評価などの叙述を結び付けながら自分の考えまとめる学習場面である。

なお、コロナ禍において厳密に対話を避けるべく配慮して授業が実施された実践である。

⑦授業実践の工夫と ICT 活用の状況

ア. 授業実践の工夫

本単元の中心的なねらいは、「読むこと」における「考えの形成」である。そのため、一律に教材文だけを読んで考えをもつことにとどまらず、いかに児童一人一人が自分の心に強く響く人物の生き方と出合えるかが大きなカギとなる。そこで本単元では、そうした伝記と出合えるよう、様々な人物の伝記から選んで読み進められるようにしていた。また一人一人が異なる人物の伝記を読んでいるからこそ、他者との交流の必然性が生まれ、厳しい制限下でも何とか交流を図ろうとする姿が見られた。次項に詳述する通り、コロナ禍に対応すべく、通常は対面しての交流が取り入れられているが、本時では対面交流は行わず、タブレットを駆使しての交流となった。それにもかかわらず、児童たちは自分の読みを伝えたい、他者の読みを聞きたいという思いをもって交流しようとする姿が見られた。これは、そうした交流を日常的に行っているからこそのものであると考えられる。

イ. ICT を活用した授業改善の成果

本時は、グループ交流の時間を十分に確保して行われた。対面交流の代わりに、各自のワークシートをタブレット上で共有し、発言する児童のワークシートの記述内容を、手元の画面で確認できるようにしていた。作成したワークシートに、更に線を引いたり丸で囲んだりする軌跡もタブレット上でグループのメンバーが共有できるようにしていた。

また、新たに共有したい資料が出てきた際には、それをすぐにタブレットで撮影し、グループの他のメンバーに共有することができていた。

ウ. 更なる改善の糸口

本時の指導のねらいが「読むこと」における「考えの形成」であることを踏まえると、交流に際しては、ワークシートのみならず伝記の本文を共有することが重要になる。これまでの実践では、ページ数の多い伝記をグループのメンバーの人数分そろえることは難しかった。しかし今回のような情報共有が可能になれば、グループのメンバーと共有しようとしている伝記の叙述を、リアルタイムで写真撮影して配信することも可能となる。前述の通り著作権法上の取り扱いは確実に行う必要がある（注6に同じ、以下の事例においても同様の取り扱いが必要である。）が、今後の授業改善に向けて大きな示唆を与えるものと思われる。

また、通常は本時の後半に行われる場合の多い一斉学習場面においても、従来は選んでいる伝記の叙述を共有しにくく、学習の目的を明確に設定しにくかったのに対して、同様に叙述の写真データを配信することで、学級の児童全員と叙述を共有して発言したり全員で検討し合ったりすることも可能となる。

なお、ある程度対面での対話が可能な状況下であれば、本を開いて交流することが基本となる。タブレットとの併用を考えていくことが必要である。

(4) 事例4

- ①授業実施時期 2021年10月
- ②学年 第5学年
- ③主な教材 「和の文化を受けつぐ一和菓子
をさぐる」
- ④主な言語活動 身近な日本の伝統文化についてスライドで解説する。
- ⑤主な指導事項 C読むこと ウ 目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどし

に必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりすること。

⑥ 単元及び本時の概要

身近な文化について調べ、その魅力を発信するため解説プレゼンテーションにまとめる学習。教材文については、解説する際のポイントや論の進め方を参考にするために読み、自分のテーマに関する資料については、情報収集のために読むといった、目的を明確にして精査・解釈を進めるものである。本時は12時間扱いの10時間目、作成してきたスライドを見直して、資料から目的に応じた情報収集ができていないかを確かめる学習である。

⑦ 授業実践の工夫と ICT 活用の状況

ア. 授業実践の工夫

教科書教材では、様々な地域の文化について調べて解説する内容となっているが、高学年とはいえ、児童は和の文化について最初から熟知しているわけではない。そのため解説するという意識に立つよりは、調査報告するという意識で学習に臨む方が自然である。これに対して本単元では、より目的を明確にして情報収集することをねらうため、解説する言語活動を重視して設定している。そのためこれまでも体験したり身近にあったりして魅力を実感している地域文化から対象を選び、更に資料からの情報を加えて解説するという単元にしていく。その結果、魅力を実感している対象をテーマとして設定することができ一人一人が詳しく、また目的を明確にして調べることができていた。更に教科書教材の論の展開の仕方についても自分の解説に生かすことができていた。

イ. ICT を活用した授業改善の成果

児童はタブレット端末を、スライドの提示のみではなく、インターネット接続して調べるなどしながら活用していた。本単元の工夫点である、地域の文化の魅力をテーマにした学習は、同時に文献資料に限られるという弱点も併せ持つ。それを克服する

使い方が工夫されていた。

またグループによっては、冊子体の文献を併用して、どの情報を引用してスライドにまとめているのかを説明する姿が見られた。更に、伝統的な遊びの動きを説明するために、文章での解説に合わせて資料の写真を取り込んでスライドに入れるなど、指導のねらいである、「目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付け」自分のプレゼンに生かそうとする姿が見られた。ICTの活用により、児童自身のこうした工夫を大きく促すことができていた。

単元全体で考えた場合、情報の収集、スライドの構成の検討、スライドの作成からプレゼンテーションまで、手持ちのタブレットで進めることができるのは大きなメリットである。

ウ. 更なる改善の糸口

情報源の資料を検討していたグループもあったが、読み原稿とタブレットのスライドのみで検討を進めていたグループも見られた。本時のねらいが「読むこと」における「精査・解釈」であることを踏まえると、情報源の資料については必ず踏まえて検討を進めることを共有理解するといった留意点が浮かび上がる。また、web ページを情報源とする場合、どのページのどこの情報かがはっきりしなくなるケースも見られた。文献資料であれば付箋を貼っておくといった手立てを取ることもなるが、それに準じた手立てを指導することが考えられる。

(5) 事例 5

- ① 授業実施時期 2021年10月
- ② 学年 第3学年
- ③ 主な教材 「すがたを変える大豆」「食べ物のひみつを教えます」
- ④ 主な言語活動 食べ物の加工について調べて家の人に報告する。
- ⑤ 主な指導事項 Bウ 自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、

書き表し方を工夫すること。
Cア 段落相互の関係に着目しながら、考
えとそれを支える理由や事例との関係など
について、叙述を基に捉えること。

⑥ 単元及び本時の概要

書いて発信することに向けて、教材文を
読んで参考にしたり、色々な情報を図鑑
等から調べたりする、「読むこと」と「書
くこと」の複合単元である。本時は14時
間扱いの12時間目。書いた文章について、
資料を確かめながら、伝えたいことが伝わ
る事例などを挙げて書いているかどうかを
グループで検討する学習場面である。

⑦ 授業実践の工夫と ICT 活用の状況

ア. 授業実践の工夫

本単元の言語活動は調査報告文を書くこ
とである。教科書教材では解説文を書く例
が掲載されているが、児童は初めて知った
食べ物の加工の秘密に驚き、書いて伝え
たいという思いを膨らませる。その際、対象
を熟知した解説風の書き振りにしてしまう
ことにより、初めて知って驚いたことを伝
えたいという思いをストレートに表現しに
くくなるため、形式的に「皆さんは…につ
いて知っていますか。」といった表現を当て
はめて書くことにとどまるといった課題が
指摘されてきた。また教材文を、時間をか
けて読み取った後で調べ学習を進めること
となるため、子供たちの調査が後手に回る
状況も散見されてきた。そこで本単元では、
食べ物の加工について調べて家の人に報告
するという言語活動を設定するとともに、
単元の初期段階から並行的に図鑑等で食
物の加工について調べる学習を進めてきた。

また、調査報告文をどのような書けば、家
の人も驚く内容になるのかを、教師のモデ
ル文を効果的に提示することにより児童と
共有していた。そのことにより、本時は「是
非とも、書き進めている報告文をもっとよ
いものにしたい」という思いに満ち溢れた
学びが見られた。具体的には、グループで
の検討が授業時間のほとんどを占めたが、

それでも児童は時間が足りないと感じるほ
ど夢中になって検討を続けた。

イ. ICT を活用した授業改善の成果

本時は、書いてきた下書きに加えて、出
典となる冊子資料と、出典となる資料を写
真撮影してタブレットに格納したものとを
併用して検討が行われた。指導のねらいが
「書くこと」の記述に関する指導事項であ
り、その効果を高めるための手段としてタ
ブレットが活用されていた。具体的には、
手元の冊子資料にはない情報などをタブ
レットから引き出して拡大して提示・共有
し、なぜその事例をもってきたのかを友達
に説明するといった活用を工夫していた。

調べ学習を行う際に、一つの資料だけを
読めば欲しい情報がすべて得られるわけ
ではない。実際には複数の資料の情報を組み
合わせて文章を構成・記述していくことと
なる。その際、冊子の資料については学級
や学年内で他の児童と共有せざるを得ない
ケースや、資料が多岐にわたり、收拾が
つかなくなるケースが見られた。タブレッ
トに必要なページの写真を格納することで、
そうした問題が解決可能になる。

ウ. 更なる改善の糸口

今回の実践で、児童がタブレットと冊子
の資料とを的確に併用していたように、今
後一層タブレットに格納する写真撮影した
資料と、冊子資料の双方の長所と短所を整
理して指導に用いていくことが望まれる。
例えばタブレットに格納する写真撮影した
資料は、保存も蓄積もしやすい。一方で、
冊子全体の情報の中のある部分を切り取
って保存することとなる。

(6) 事例6

- ① 授業実施時期 2021年10月
- ② 学年 第1学年
- ③ 主な教材 「いろいろなふね」
- ④ 主な言語活動 乗り物について調べて図鑑
にまとめる。
- ⑤ 主な指導事項 Cウ 文章の中の重要な語

や文を考えて選び出すこと。

⑥ 単元及び本時の概要

船の役割やそのための構造について解説する教材文を元に、様々な乗り物の図鑑を調べ、自分の気に入った乗り物の役割や構造を説明する文章を書く学習である。本時は10時間扱いの6時間目。自分が選んだ乗り物の働きにぴったり合ったつくりを選び出す学習である。

⑦ 授業実践の工夫と ICT 活用の状況

ア. 授業実践の工夫

通常の単元構成では、まず教科書に記載されている4種類の船について4時間程度をかけて読み取らせたのち、図鑑等を調べて自分の乗り物の働きやつくりを見付ける学習が一般的である。しかしこれまでの同様の実践では、教科書に時間をかけ過ぎるため、本来的にねらう、働きやそれに合ったつくりを説明する上で重要になる語や文を考えて選び出すことがむしろ実現しにくい状況が散見されてきた。特に図鑑情報から「重要な語や文を考えて選び出す」ための指導時間が十分確保されにくいため、個別対応に追われる状況に陥るケースが多く見られた。

これに対して本単元では、「お気に入りの乗り物を説明する乗り物図鑑を作るには、どんな情報が必要なのか」という観点で教科書教材をより重点的に扱うことで、ねらいを明確化すると同時に、図鑑情報を選ぶ時間や、それを交流によってより確かなものにする時間を生み出すことが可能となった。また、ペア交流のためのモデル動画作成や日常的にペア交流を学習に取り入れて児童が習熟できるようにするなどの手立てが十分に機能し、児童は20分以上、夢中でペア交流を繰り返していた。

イ. ICT を活用した授業改善の成果

本時の冒頭部では、教師によるペア交流のモデル提示を、大型モニターを使用して行った。従来一般的に行われていた、話し合いのポイントを口頭で確認することに比

べて、児童の動画への注目度は高く、有効であった。また教師がモデル動画を作成する過程において、対話で使用する言葉の具体的な検討に加えて、どのように座って本を開くかといった細部の所作についても、指導のねらいを踏まえて吟味することができ、学びの質を高める授業改善に大きく機能していた。

更に本時では、交流の途中に、上手にできている児童をピックアップし、全体の場で選んだ図鑑を拡大して提示していた。本時のねらいが「文章の中の重要や語や文を考えて選び出すこと。」であることを踏まえると、全員が文章を共有することができるため、的確な活用が工夫されていると考えられる。

ウ. 更なる改善の糸口

本時では、動画を用いたペア交流の具体的なイメージの確認等を含めて、ペア交流開始までに20分を要した。その後の児童のペア交流の質が非常に高かったことを踏まえると、可能な限りこの導入をコンパクトに収め、交流の繰り返しを確保する必要がある。今後1年生の指導においては、より日常的に様々な学習の進め方について、動画で収録し、随時見られるようにするといった工夫が考えられる。

また、特に低学年では活動を一つ一つ区切り、全員がそろそろことを確認して学習を進める丁寧な手立てがとられることが多い。しかしこの手立ては、時間を持て余す児童と、時間が足りずに急がざるを得ない児童の双方生み出してしまうというデメリットもある。一人1台端末の活用と相まって、児童が必要だ、あるいは先に進める状態だと判断したタイミングで学びを進めていくロングレンジの学習を可能にする手立てを打つことも授業改善効果が期待される。その際、誰とペア交流したいのかを判断しやすいように、例えばタブレットに、誰がどんな乗り物を選んでいるのかを一覧にした情報を入れておくことなども考えられる。

(7) 事例7

- ①授業実施時期 2021年10月
- ②学年 第3学年
- ③主な教材 「パラリンピックが目指すもの」
- ④主な言語活動 自分が選んだパラリンピックについて調べ、クイズを作り交流する。
- ⑤主な指導事項 Cウ 目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約すること。
- ⑥単元及び本時の概要

パラリンピックについて解説した教材文を元に、興味をもった競技について調べてクイズにする。その際、クイズの答えの解説を、資料の要約を基にまとめていく。本時は9時間扱いの6時間目。集めた資料からクイズを作り、交流する中で目的を意識した要約になっているかを確認合う学習である。

- ⑦授業実践の工夫と ICT 活用の状況

ア. 授業実践の工夫

本単元では、要約の能力の育成を目指してクイズを作る言語活動を設定した。その際、指導事項に示す通り「目的を意識」することを一人一人が確実に実感できるように、クイズの答えには資料を要約した解説を付けることとした。この工夫により、指導のねらいに迫ることができた。

イ. ICT を活用した授業改善の成果

本時の後半では、ペアやグループを組み、クイズを解き合った後、更に解説を検討し合う学習が行われた。その際、これまでに調べてきた図鑑資料を撮影してタブレットに格納し、必要に応じて引き出して検討を進めていた。児童は、同じ競技について同じ資料を選択していても、着目した文章や言葉が異なることなどに気付き、「目的を意識して、中心となる語や文を見付け」る学習を行っていた。

ウ. 更なる改善の糸口

本時では、タブレットに格納した資料を的確に引用していたグループがある一方で、クイズのシートを中心に検討するグループも見られた。指導のねらいが「C読むこと」のウの指導事項であることを踏ま

えて、今後どのように交流・検討を進めるのかについて児童と確実に共有する手立てをとっていくことが望まれる。

(8) 事例8

- ①授業実施時期 2021年10月
- ②学年 第5学年
- ③主な教材 「伝えたい、心に残る言葉」
- ④主な言語活動 心に残る言葉を取り上げてメッセージスピーチとして発信する。
- ⑤主な指導事項 Aア 目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討すること。

Aウ 資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫すること。

- ⑥単元及び本時の概要

心に残る言葉をメッセージスピーチとしてまとめる学習である。本時は6時間扱いの4時間目、聞き手に自分の思いが伝わるように、話し方を工夫する学習である。

- ⑦授業実践の工夫と ICT 活用の状況

ア. 授業実践の工夫

本単元では、教師自身が心に残る言葉についてのメッセージスピーチモデルを作成し、児童と共有し、ゴールイメージの明確化を図った。また導入後にインターバルを置き、一人一人が心に残る言葉を見付けられるように学習の過程を工夫した。本時では、児童同士の良好な関係性の下、よりよいスピーチにするために熱心に意見交換する姿が見られた。

イ. ICT を活用した授業改善の成果

本単元に先立って、校内の教師10人程度の協力を得て複数のモデル動画を収録した。児童はその動画をタブレットに入れて、何度も見返して具体的なイメージをつかんでいった。こうした多様なモデル提示は、様々な児童に対応できる非常に有効な手立てであると考えられる。本時の後半では、スピーチをお互いに収録し合った。これを継続的に行うことで、自分のスピーチの向

上を実感することもできていた。

ウ. 更なる改善の糸口

児童は本時後半のスピーチの録画にかなり習熟していた。これに対して前半の相互評価場面では、音声言語スピーチを言語活動として行っているため、細部にわたるリアルタイムでの検討はしにくい面が出てくる。このようなことを踏まえると、単位時間のまとめとしての録画による記録のみならず、本時の前半から録画し合い、それを再生しながら検討することも有効であると考えられる。

(9) 事例 9

- ①授業実施時期 2021 年 10 月
- ②学年 第 4 学年
- ③主な教材 「くらしの中の和と洋」
- ④主な言語活動 日本と外国の暮らしについて資料を要約してガイドブックにまとめる。
- ⑤主な指導事項 Cウ 目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約すること。
- ⑥単元及び本時の概要

教科書教材の文章をヒントに、本や資料で集めた情報について、自分が興味を強く引かれたことを伝えるために要約し、日本と他の国の暮らしについて紹介する学習である。本時は 12 時間扱いの 8 時間目、要約したものを交流し、伝えたいことに合った言葉を選んでいくについて検討する学習である。

- ⑦授業実践の工夫と ICT 活用の状況

ア. 授業実践の工夫

本単元では、総合的な学習の時間との連携を図り、テーマについて十分関心を高めた状態で学習に入っている。また指導のねらいを確実に実現するために、常に「ガイドブックで調べたことを知らせて、家の人や先生をびっくりさせよう」「そのために伝えたいことが伝わる要約になっているかを考えよう」など、ガイドブックで伝えたいことを明確に意識するための手立てが取られていた。子供たちは終始熱心に学び合

い、本時の学習においても時間いっぱいを使ってお互いの要約を検討する姿がどのグループでも見られた。

イ. ICT を活用した授業改善の成果

本時の導入では、教師によるグループ協議のモデル動画を提示することで、端的に学習の姿を児童と共有することができた。また、グループ協議では、常に自分の伝えたいことが何なのかを他のメンバーに伝えたい上で、タブレットに取り込んだ資料の画像を用いて、どの文章のどの言葉を用いて要約したのかを説明することができていた。その際、タブレット上で資料の、伝えたい中心となる語や文にアンダーラインを引いており、協議を進める上で非常に有効であった。

ウ. 更なる改善の糸口

児童はグループ協議を進める中で、更に伝えたいことを焦点化させていった。その際、要約文の下書きに新たな情報を付け加えるために全体の分量が膨らみ、戸惑う場面も見られていた。本単元ではガイドブックも最終的にタブレットで作成する計画である。そこで、本時に作成している手書きのシートがあくまでも下書きであることを意識させることで、必要度の低い情報は取り消し線を引くなどして削除し、新たな情報を付け加えるといったことを容易に進められるだろうと推測できる。そうした語や文の選択過程を記録として残す上では、本時の指導のように手書きの下書きとタブレットで完成版のガイドブックを作成することを併用する手立てが有効になるものと考えられる。

(10) 事例 10

- ①授業実施時期 2021 年 10 月
- ②学年 第 2 学年
- ③主な教材 「お手紙」
- ④主な言語活動 がまくんとかえるくんシリーズを読み、お気に入りの作品の好きな場面をペープサートで演じて紹介する。

⑤主な指導事項 Cエ 場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像すること。

⑥単元及び本時の概要

教科書教材の「お手紙」及びそのシリーズ作品を読み、好きな場面を見つけてペープサートで演じていく。その際、ペープサートの動きを考えたり、付け足しの言葉を考えたりすることで「登場人物の行動を具体的に想像する」能力を一人一人に確実に育もうとするものである。本時は11時間扱いの7時間目、選んだ作品の好きな場面を、ペープサートを動かしながら読み合う学習場面である。

⑦授業実践の工夫とICT活用の状況

ア. 授業実践の工夫

本単元では、単元の導入前からの教師による丁寧な指導の下、児童一人一人がお気に入りの物語と出会うことができた。また、ペープサートで物語の好きな場面を紹介するというゴールを動画で明確に児童と共有するなど、学ぶ目的を常に意識できるよう工夫していた。加えて、教科書教材とシリーズ作品の読みをスモールステップで交互に繰り返すなど、低学年の児童が学びやすい手立てを十分に工夫した単元であった。更に本時で重点的に行われたペア学習は、国語科のみならず各教科等の学習でも取り入れるなど、児童が安心して取り組めるよう丁寧に指導がなされていた。その結果、児童は細切れの指示によって動くのではなく、一人学びからペア交流へと進むことを自ら繰り返し、充実した学びが実現された。

イ. ICTを活用した授業改善の成果

本時のまとめの段階では、ペアでお互いのペープサートによる紹介をタブレットで撮影し、学習成果を確かめ合っていた。単元の学習過程で繰り返しこうした活動を位置付けることで、児童にとっては自分の成長を確認する機会となる。また低学年であっても習熟していくことで、短時間で動画撮影を完了できるため、作品を読んで紹介し合うという、最もねらいに迫るための

学習活動の時間を確保することができる。

ウ. 更なる改善の糸口

タブレットの使用に限らず、児童自身が判断してロングレンジの学習を進めていく学習指導形態は、児童自身が学習をより個別最適なものにしていくものである。こうした学習指導を実現する上では、授業者の明確な指導の見通しの下、緻密で継続的な指導が必要である。こうした指導が実現することで、児童がこれまで以上に大きく成長することが示された実践であった。

6. 考察

(1) モデル動画の活用について

モデル動画の提示は、従来の口頭などでの確認に比べて情報量のはるかに多く、効果的である。その活用については、

①スピーチなど、音声言語を中心とする言語活動のモデル

②学習活動としての対話やグループ協議のモデル提示に大別される。学習のイメージをコンパクトに提示できるとともに、話し方のみならず姿勢や文章資料の用い方などについても共有しやすい。特に低学年では効果が大きい。その反面、情報量が多いだけに、本時では動画の中の、どこを共有するのかを明確に押さえる必要がある。そのためには、できるだけ継続的にそうした動画を活用していくことが有効である。またこれらのモデルは、モニター上で共有するのみならず、一人1台端末に格納し、随時視聴し、ポイントを確認できるようにすることが有効である。

(2) 単元全体で一貫した活用について

中・高学年以降では、情報収集・整理からプレゼンの作成など、一貫した使用が可能となる。一人1台端末の活用によって、紙ベースでの学習以上に、材料を並べ替えて構成を再検討したり、文章を推敲したりしやすいという利点が生かせる。その際、常に単元全体の学習を見通して活用を図ることがポイントとなる。単元全体の学習進度を調整したり、必要に応じて追加取

材するなど、前の学習過程に戻って学びをより充実させたりするといった試行錯誤を生かす学びの実現が期待できる。

(3) 言語教材とタブレット活用の関係について

国語科の指導のねらいを実現する上では、タブレットに取り込んだ資料だけでは十分ではない場合が多い。必要な箇所を撮影してタブレットに格納する場合と、冊子資料を用いる場合とを比較してみると、タブレットに格納しておけば、それをいつでも見返すことができるという利点があるが、冊子資料そのものとは異なり、冊子の情報全体を俯瞰することや他のページの内容を確認したりすることはできないというデメリットもある。双方の長所と短所とを比較しつつ、適切に併用していくことが望まれる。

また集めた情報が多岐にわたる場合、冊子資料ではそれが散逸しやすいのに対して、写真撮影してタブレットに格納すれば複数の資料を手元ですぐ引用できるというメリットがある。しかし、その資料のどの箇所が目的の情報なのかについては、アンダーライン等で目印を付けて活用しやすくするといった使い方も必要となる。

(4) 自己評価及び教師による評価材料の蓄積と活用について

タブレットに学習成果を蓄積していくことで、児童は自分自身の伸びを明瞭に把握することができる。また同時に、教師による評価も行いやすくなる。特に「話すこと・聞くこと」の単元や音声言語系の言語活動を位置付けた単元では、これまで厳密な評価が難しかったが、動画データ等の蓄積が可能となることから、従前以上に容易に評価が行えることとなる。

(5) 日常的な授業改善との関連について

本論考で取り上げた事例は、いずれも精緻に単元が構想され、かつそこに至るまでに緻密に指導が積み重ねられている実践である。ICTやタブレット端末を活用すること自体で授業改善が進むわけではなく、こうした授業改善があるからこそ ICT や一人 1 台端末の機能が生き

てくるものであると言えるだろう。

7. 展望

2021 年度の特に後半以降、一人 1 台端末の活用が急速に広がるとともに、その活用の在り方の解明も急務となっている。本論考においては、その土台を作ることを目指した。今後更に実践事例を集約し、より系統的に改善が図られるよう整理していくこととする。

注

- 1) 文部科学省「GIGA スクール構想の最新の状況について」、2021
- 2) 水戸部修治『ICT & 1 人 1 台端末を活用した言語活動パーフェクトガイド』、明治図書、2021
- 3) 小学校学習指導要領第 2 章第 1 節国語、平成 29 年
- 4) 上掲 2) p.14
- 5) 中央教育審議会『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)』(令和 3 年 1 月)
- 6) 著作物の教育利用に関する関係者フォーラム「改正著作権法第 35 条運用指針(令和 3 (2021) 年度版)」、2020 年 12 月等を踏まえ、適正な範囲で複製等が行われるようにする必要がある。また著作権法(昭和 45 年法律第 48 号)第 35 条第 2 項(法第 102 条第 1 項において準用する場合を含む。)が規定する補償金が発生する場合、学校の設置者(教育委員会等)との連携が必要となる。

謝辞／付記

本論は、JSPS 科研費 JP 21K02534「『各教科等の学習に機能する読解』育成カリキュラム及び授業改善システムの構築」による研究成果の一部をまとめたものである。

また本論考で取り上げた事例実践校(石川県加賀市立分校小学校、滋賀県彦根市立金城小学校、京都市立下京渉成小学校、京都市立朱雀第七小学校、大阪府高槻市立日吉台小学校、高槻市立五領小学校、茨木市立春日小学校、枚方市立招提小学校、枚方市立交北小学校)におかれては、国語科の優れた授業実践をご提供いただいた。ここに改めて感謝申し上げます。